複合災害被災者の回復とレジリエンス

福島県の被災者を対象とした面接調査のテキストマイニング

○竹林 (兼子) 唯^{1,2}・中島聡美^{1,2} (非会員)・桃井真帆^{1,2} (非会員)・伊藤亜希子^{1,2} (非会員)・

前田正治^{1,2} (非会員)・安村誠司^{2,3} (非会員)・大戸 斉² (非会員)

(¹ 福島県立医科大学医学部災害こころの医学講座・² 福島県立医科大学放射線医学県民健康管理センター・

³ 福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座)

キーワード：レジリエンス、東日本大震災、原発事故

Recovery and Resilience of Triple Disaster Victims -a text mining approach-
Yui TAKEBAYASHI^{1,2}, Satomi NAKAJIMA^{1,2}, Maho MOMOI^{1,2}, Akiko ITO^{1,2},
Masaharu MAEDA^{1,2}, Seiji YASUMURA^{2,3} and Hitoshi Ohto²

(¹Department of Disaster Psychiatry, Fukushima Medical University, ²Fukushima Health Management Survey Office, Radiation Medical Science Center for the Fukushima health management survey, Fukushima Medical University, ³Department of Public Health, Fukushima Medical University)

Key Words: resilience, great east Japan earthquake, nuclear power plants accident

目 的

東日本大震災は、福島県では地震、津波、原発事故という複合災害を引き起こした。福島県の県民健康調査によれば、精神健康が悪化したままの住民がいる一方で、精神健康を維持、あるいは回復している住民がいる (Ohto et al., 2017)。

本研究では、面接調査を実施し、東日本大震災の被災者個人のレジリエンス (回復力) とその要因を明らかにすることを目的とした。

方 法

調査対象：被災時に福島県に在住していた 8 名 (女性 7 名、平均年齢 53±13.6 歳)。

調査材料：面接調査では、被災状況、避難経緯の他、レジリエンスの要因を明らかにするために、以下の項目を聴取した。(1) 被災後の生活や気持ちの上で役に立ったこと、(2) 被災による考え方や生き方の変化、(3) 被災体験から得たもの、(4) 現在の生活の中で、喜びや満足をもたらすこと、(5) 被災地の方が元気になるために今後必要なこと。質問紙調査には、K6、Post-Traumatic Stress Disorder Checklist (PCL) 4 項目、日本語版 Lubben Social Network Scale 短縮版 (LSNS)、Connor-Davidson Resilience Scale (CD-RISC) を用いた。

調査手順：調査参加者は、面接調査の前に、質問紙に回答した。面接調査では、参加者はまず、震災の 1 年前から調査時点までの精神的健康度の変化をグラフにした。その後、上記材料を用いた面接調査を行った。精神的健康度の変化が Norris et al. (2009) で提唱されている resilience、recovery、resistance の軌道をたどっている 7 名を分析対象とした。

分析方法：上記の面接調査項目 (1)～(5) で語られた内容を元に、精神科医 1 名、臨床心理士 2 名、精神保健福祉士 1 名で、KJ 法を用いて、分類を行なった。また、テキストマイニングによる分析を行い、語の出現頻度、調査項目との関連を検討した。テキストマイニングツールとして、KH Coder ver. 2.00f を用いた。

結 果

分析対象者のうち、K6、PCL 得点を基準としたハイリスク者はいなかった。また CD-RISC 得点は 69.5±16.2 であり、アジア圏の一般人口平均得点より高かった (中島, 2010)。

KJ 法の結果、レジリエンスに関連する要因として、「生活上の支援 (一般的な支援、家族の支援)」、「避難先での肯定的受入 (避難先での交流、社会的活動への参加)」、「同じ避難元の人との交流 (震災前からの友人との交流、(避難について話せる) 集いの場所)」、「仕事 (仕事の有無、仕事が充実してい

る、人の役に立っていると感じる、職場での良好な人間関係)」、「趣味・楽しみ」、「個人内の変化 (平時の生活のありがたさを感じた、新しくせざるを得ない状況の中であるようになったことがあった、諦観的需要)」、「故郷との距離」、「放射線の不安への慣れ」の 8 カテゴリー (サブカテゴリーを含めると、16 カテゴリー) に分類された。

テキストマイニングの結果、面接調査全体での語の出現頻度は、思う (85 回)、人 (80 回)、言う (41 回)、行く (29 回)、仕事 (23 回) の順に多かった。また調査項目との関連を検討するために対応分析を実施した結果、(1) 役立ったこと、(3) 被災体験から得たことでは「生活上の支援」、(4) 現在喜びや満足をもたらすことでは、「趣味・楽しみ」、(2) 考え方や生き方の変化、(5) 今後必要なことでは、住宅、墓などが特徴的であった。

考 察

本研究の結果から、人間関係と仕事については、KJ 法でもレジリエンスに関連する要因として挙げられ、テキストマイニングにおいても出現頻度が多かったことから、レジリエンスに大きく影響する要因であることが示唆された。また調査項目との対応分析の結果から、被災直後は周囲からの支援に助けられたが、今後被災地に必要なこととしては、墓や住まい、周りとの関係などの課題があることが示唆された。

図 面接調査項目と抽出された語の対応分析結果